

文学大会「詩」 小・中学生の部

(優秀) 小学生の部

マスク

水戸市立下大野小学校 三年 長谷川 結大

マスクは、ぼくをまもってくれる
マスクは、ウイルスからまもってくれる

ふつうの紙でもいいんじゃない？
と思ったけど

なんかマスクのほうがいいかも

なかみをみてみよう
かたいぼうがある
なるほど

ここがおれるんだ

あとは、ふつうの紙でもいいんじゃない
でもマスクのほうがいいかも
いや、でも紙がいいかな
どっちだろう
マスクかな

だってサイズもいっぱいあるし
耳にかけるひもある

やっぱマスクのほうがいい
マスクか紙だとマスクになるりゆうは
これか

わかったよ
「マスクありがとう」

【講評】

マスクと紙をくらべて、何回も「マスクがいいかも」と思いながら、そう思うりゆうをさがしましたね。マスクのかたいぼうや、いろいろなサイズがあること、さいごに、耳にかけるひも見つけて、やっとなつとくできたようすがよく書けています。

私は詩

水戸市立柳河小学校 五年 小松崎 詩

私の名前は うた

「詩」と書いて うた

私の心は いつも歌う

歌う 心の 色んな リズム

生まれる

不思議な メロディー

悲しい なみだが 落ちる 音

温かい やさしい ひびき

一人ぼっちの 静かな 音

怒りが 叫ぶ 強い ひびき

希望が 明るく 輝く 音

楽しい 笑い声が ひびく

みんなぜんぶ うたという

心が奏でる すてきな「詩」

【講評】

作者の名前「詩」^{うた}を題材にする発想が秀逸です。そして、豊かで複雑な心の動きを音や響きで巧みに表現しています。体言止めの繰り返しは、言葉が打楽器を打ち、「詩」^{うた}を歌っているように感じさせます。

春のかけら

水戸市立五軒小学校 六年 渡士 愛梨

桜は春のかけらをつけている

身につけている 春のかけらを

虫・花・鳥が

まっている

そよそよと吹く風は

春のかけらを乗せて

どこまでも

どこまでも

とんでいく

桜は 春のかけらがなくなると

安心して

全身を緑色に

衣替える

【講評】

「春のかけらって、何だろう」。そんな謎解きに引き込まれる作品です。一つ一つの表現が、その謎を解くヒントになっています。桜は季節を変える意思と力を宿していると感じる作者の感性に驚きました。

四季

水戸市立内原小学校 六年 大津 優那

春がやってくる

あたたかな日の光

色あざやかな草花

キラキラしたランドセル

夏がやってくる

ジリジリした暑さ

頭にひびくセミの声

光りかがやくプールのみなも

秋がやってくる

色づいた山々

虫たちのオーケストラ

遠足前のねむれない夜

冬がやってくる

ふわふわな白い息

力持ちなしもばしら

白い校庭にひびく笑い声

そしてまた春がやってくる

私達は大人にちかづいていくよ

【講評】

「(季節)がやってくる」の反復は、四季の表現に適しています。みんなが共有できる学校での経験を織り交ぜながら、季節を一巡。規則的な音数や行数はリズムがよく、季節を巡る曲を聴くような作品です。

ツリークライミング

水戸市立内原小学校 六年 栗原 悠真

つつじ山公園の山頂にある

もみ的大木

山頂に大きく根を張り

空に向かって幹を大きく伸ばす

大木にふれると

木肌のごつごつした感触

木のエネルギーを感じる

木と友達になって

ツリークライミング

ロープを使ってぐんぐん上へ上へ

どんどん広がる景色

空と雲にどんどん近づく

風になびき鳥になったようだ

わぁなんて気持ちがいいのだろう

下を見ると

まるであざやかなじゅうたんのようだ

満開のつつじが

わぁなんてきれいなんだろう
木はいつもながめているんだな
この素晴らしい景色を

【講評】

同じ音を繰り返す擬態語や比喩を使い、躍動感や爽快感を表現しています。木肌や風、つつじの感触や色彩も、五感に伝わってきます。大木と感動を共有する最後の連が、眺望を悠久のものにしています。

かたち

水戸市立内原小学校 六年 富田 貴大

まる　さんかく　しかく
見る角度によってかたちは
かわる
人と似ている

人も必ず一つは
いいところがある
やっぱり物のかたちに似ている

人のかたちは物ではなく
気持ちのかたち
見えない物のかたちも
そんざいする

人や物
この世のすべてに
かたちは
そんざいする

【講評】

題は、詩の一行目。題名や一連目の図形のかたちから、人のよき個性へと展開していく構成に工夫を感じます。視点の転換を促すことで、人の個性という見えないかたちの存在と大切さを伝える作品です。

(優秀) 中学生の部

自分メモ

水戸市立第二中学校 二年 金浦 志帆

透明な傘と
初夏のスイカと
週末のカラオケが好きで
野菜と魚
平日の早起きと
洋服のタグが嫌いで
号令の時に時間割を見たり
驚くと手に力を入れる癖がある
でも、こんなに自分を知っているのに
まだ沢山知らない事があるから
人間は面白いのだ

【講評】

好きなもの、嫌いなもの、そして癖。等身大の自分をよく知っているけれど、これから先、まだまだ知らない自分に出会えそうな予感を、「人間は面白いのだ」と表現しています。志帆さんが、未来に希望を持っていることがよくわかります。

見上げていたのに

水戸市立第二中学校 二年 木村 真緒

気づいたら お母さんより
ほんの少しだけ 空が近い
大きくなったね と笑うけど
中身はまだまだ 変わらない
小さい頃は 手をつなぐのが当たり前
それがずっと 続いていくと思っていた
見上げていたのに
今はそっと隣で歩いている

【講評】

母親より伸びた身長と、まだまだ心の成長とのバランスがつかみきれない思春期の戸惑いをうまく表現できました。お母さんは成長を喜んでくれているけど、真緒さんは、もう少し隣で見守っていてほしいなという思いが伝わってきます。

春風便り

茨城中学校 二年 加藤 凜音

歩いて二十分の道のり
風にはこばれて髪が舞う
見覚えのある道のり
視界に淡いピンクがよぎる
薄桃色の花道
ふと顔を上げてみる
百年後のこの道
淡紅色の薫りが吹きぬけていく

【講評】

待つて、待つて、ようやく咲いたと思ったら、あつという間に風に吹かれて散ってしまう桜の花びら。それが積もってきた桃色の花道が、百年後も続いている様子に想いを馳せる凜音さん。題名も併せて、豊かな感性が感じられます。

土と人生

茨城中学校 二年 清水 大幹

土が人生を表しているように見えた
雨を人生の失敗にする

雨がふると土はぬれる
時が経つとかわく

失敗すると気持ちがよくない
時が経つと気にしなくなる

雨がふらないと良い土にならない
雨はほどよく必要だ

失敗がないと良い人生にならない
失敗はほどよく必要だ

【講評】

土を人生に見立てる大幹さんの視点が素晴らしいと思いました。そして、土にとって雨は必要不可欠。雨が降ると憂鬱になり、失敗すると気持ちがよくないけれど、土にも人生にも、どちらもが程よく必要なのだと思い知らされます。

待ち時間

茨城中学校 二年 額賀 美帆

空が綺麗だった
雲を目で追っている
電車が来た
秒針を見ているより
ずっと速かった
ので
なんとなく嬉しくなった

【講評】

日々の生活の中の何気ない嬉しさを、美帆さんは上手に切り取りました。普段は、電車を待つ間が長く感じるけれど、雲を目で追いかけているとその時間が短く感じるというのは、皆さんも経験があると思います。無駄のない言葉で表現できました。

(佳作) 小学生の部

おふろ

水戸市立下大野小学校 一年 平戸 聖鳳

あたたかい
おふろ
ほかほか
あたたかい
おふろあがりの
あいすはつめたい
でも
おふろは
あつたかい

やさい

水戸市立下大野小学校 二年 大川 実桜

やさいがたべられたら
どんな気もちなんだろう
たべられたら
おなかの中で
たんけんしてるのかな
おなかの中で
パーティーしてるのかな
わたしも
じぶんのからだの中を
たんけんしたいなあ

友達

水戸市立柳河小学校 五年 生沼 妃希

友達といると楽しい
友達といるとうれしい

だけど けんかすることもある
やきもちをやくこともある
たまに、嫌なことをしてしまうこともある

それでも私を思ってくれる
私をはげましてくれる
私のまちがいを教えてくれる
おたがいに信じあえる 助けあえる人を
私は大事にしたい

雨

水戸市立柳河小学校 五年 飛田 遥斗

雨がふる
ぽつぽつぽつ雨がふる
休みの日

せつかく休みで雨がふる
ぽつぽつどこにもいけない
せんたくものもだせないし
お母さんもこまりがお
ぽつぽつ雨がふったら
ぽつぽつ家でボーっとしてる
ぽつぽつぽつうれしいな
植物さんにはうれしいな
雨がふる
ぽつぽつぽつ雨がふる

登下校

水戸市立下大野小学校 五年 小泉 春樹

登校中に虫がとぶ
登校中にこいがおよぐ
登校中に電車がくる
登校中にあいさつ
登校中に楽しく歩く
つかれたなあでも、楽しいなあ

下校中に虫も歩く
下校中に電車がもどる
下校中にまたあいさつ
下校中に車にもあいさつ
下校中に楽しく走る
友達と楽しくおしゃべり

にじ

水戸市立大場小学校 五年 秋山 花歩

そらにうかんだにじ
泣いた後にはかならずにじ色
そこからそこまで走りたい
心にうかんだにじ
空が晴れたら
心も晴れた

五年一組

水戸市立大場小学校 五年 福田 かな

私たちのクラスは、元気いっぱい
やさしい心、みんなに届け
だれかが困っているときは、
だれかがすぐにつける
笑顔あふれる五年一組
愛があふれて、みんな仲良し
面白い話、遊びもいっぱい
みんながいるから楽しい毎日
世界一のクラス五年一組

夏の音

水戸市立下大野小学校 六年 立原 陽菜

夏の音が聞こえる

セミがミンミン

ふうりんりんリン

プールでチャパチャパ

まつりでワイワイ

たいこがドコドコ

花火がドンドン

夏は にぎやかな音がたくさん

空の海

水戸市立下大野小学校 六年 宮崎 心花

空は海みたい

上から下までグラデーション

本当の海のように

その海には何がいるのかな

雲は魚みたい

スイスイ空の海で泳いでる

風は波みたい

やさしくふく風さざ波だ

強くふく風高波だ

みあげてごらん

空は海みたい

雲は魚みたい

風は波みたい

空の雲

水戸市立内原小学校 六年 國井 結月

ふわふわ 空を漂う
白い雲が ゆっくりと
お昼の空に 絵を描く
形は自由 風のまま

時々 お昼寝するみたいに
ぬくもり感じて 静かに
でも 急に 走りだす雲
あつという間に 遠くへ行く

雲の上には 何があるのかな
鳥たちが 見てるのかな
私もいつか 雲の上に
夢をのせて 飛んでみたいな

人のひょうじょう

水戸市立内原小学校 六年 芝山 志歩

人のひょうじょうはいっぱいある
えがお
よろこんでいる
えがお
面白がっている

人のひょうじょうはいっぱいある
泣き顔
悲しんでいる
泣き顔
おびえている

人のひょうじょうはいっぱいある
しかめっ面
いかっている
しかめっ面
くやしがっている

来年

水戸市立内原小学校 六年 廣川 晶斗

今は小学生

来年は中学生

一年後はちがう自分

たった一年で

ぼくは変わってしまうのかな

今は小学生

来年は中学生

一年後はちがう自分

たった一年で

ぼくは変わっていないといけないのかな

何も変わらないぼくと

何かが変わったぼくが

ハイブリッドしていたら

きつとぼくは

新しい世界を

新しい自分で

前に進んでいるにちがいない

(佳作) 中学生の部

サッカー

水戸市立第一中学校 一年 櫻庭 碧

サッカーっていいな

サッカーは心が晴れる、

心とともに成長する

色々と悩まされる、

成長するにつれ心は曇る

でも、曇り空が晴れるとき

達成感がある

そうすると楽しくなる、

その繰り返しがあるから成長する

やっぱりサッカーっていいな

時間

水戸市立第一中学校 一年 鈴木 優美香

遊んでいる時
好きな授業
楽しい時
この時間はあつという間
でも
つまらない時
退屈な時
苦手な授業
この時間はながあく感じる
楽しい時も退屈な時も同じ時
不思議だなあ

一歩

水戸市立第一中学校 一年 根本 柚葉

一歩 それは楽しいこと
一歩 それは少し辛いこと
一歩 それはひとりひとり違うこと
みんなはそれぞれ必ず一歩を歩む
一歩 それはだれにもゆずれないこと
一歩 それは同じものはないこと
みんなそれぞれ一歩を歩み
それが重なって大きな人生となっていく

すり足で一步

水戸市立第一中学校 一年 延島 咲葵

はつきよい

あのしゅん間が待ち遠しく感じる

ぶつかり合って勝負が決まる

日々の努力がつながるしゅん間

私もみんなも経験する

かこくな試練

夢や目標達成への道のり

乗り越えた先には

だれかの笑顔が待っている

雨

水戸市立石川中学校 一年 巖寄 正宗

雨が降る

雨が降る

雨が降る

雨が降る

雨が降る

雨が止む

日の光が当たって

水たまりが輝く

音

水戸市立石川中学校 一年 小檜山 蒼

ぼくの口から出た 小さな丸

学校のチャイムから出た 大きな四角

だれかが泣いている とがった三角

トロンボーンから出た 長い丸

何かが追いかけてくる つぶれた四角

木が体をゆらす とても小さな三角

この世界は いろんな音であふれている
溶けて 混ざって 耳に届いて

春時雨

水戸市立石川中学校 一年 嶋田 梨乃

涙で落ちた桜を
澄んだ空が見ている

七色の虹が
背中を押している
大丈夫だと

海と波

水戸市立石川中学校 一年 藤岡 英太郎

波がうたえば
海はおどる

――終わることなく

青

水戸市立第二中学校 二年 小森 こころ

どこまでもつづく
船の外側の青
光が反射して
宝石のように輝く
風に揺られ
ゆらゆらとなびく
人間のような
表情を見せるその青が
私の心までも輝かせてくれる

花鳥風月

水戸市立第二中学校 二年 吉川 奈那

花は優しい微笑みを浮かべ

鳥たちは美しい歌声を奏でる

風は自由に舞いおどり

月は静かに大地を包みこむ

自然に心を委ねて

世界の美しさを知る

花鳥風月の調和の中で

今日も生きていく

文学大会「詩」一般の部

優秀（第一位）

黒衣の蝶―楽園について―

北山 蒼生

菜の花畑を
風は 吹き抜けていく

閉じては 開かれ
開いては 閉じられて
光のような 空色の斑点は
黒衣の羽根に 揺れている

その向こう側には
淡い 陽射しが降り注ぎ
白い花影が 揺らいでいる

銃声のように
春雷が 鳴り響き

この世界は あの世界へと
引き裂かれていく

吹き付ける 黒い風
降りしきる 灰色の雨
楽園の灯は 消し去られ

白いサナギは
いつしか 春の陽の温もりを
忘れ去り 生きていく

園から 園へ
黒衣を纏った蝶は
父も知らず 子も知らず
蜜の香りに誘われて 舞う

新緑の山裾に

やますそ

淡い 陽射しは降り注ぎ

青い風に 揺れる

シロツメクサの園に

夏の光を閉じ込めた

空色の斑点が 黒衣を充たして

舞い続けている

【講評】

生の不安と陶酔を濃厚なイメージで象った作品です。

「蝶」は彼岸と此岸を行き交う魂の象徴としての意味を持つていますが、この作品では、彼岸とも此岸ともつかない

「楽園」を彷徨う孤独な「蝶」の舞姿が、整った言葉で魅力的に形象化されています。

優秀（第二位）

春のはじまり

橋本 花梨

まだ春とは言えない
冷たい風が頬へ向かってくる
ぴりりとした膜をまもって
早足で歩いてく

新しい場所へ
慣れないスーツで向かう
寝ぼけても居られぬ緊張感を
ただガタゴトと電車が運ぶ

これからどうなるのだろう
なんとなくきついネクタイをいじりながら
ぼんやりと乗っている

降りた駅、今日から馴染みになる駅で
シジュウカラを見つけた

ネクタイをビシっとしめた模様の体で
ただまっすぐと飛び立っていった

【講評】

新社会人の心模様を上手く捉まえた作品です。「ネクタイ」をキーワードにして「シジュウカラ」と重ねた発想がとても良い。「まっすぐに飛び立っていった」「シジュウカラ」との対比で、不安定な新社会人の心の揺れが良く伝わって来ます。

優秀（第三位）

間違えたところだけ覚えてる

田村 勝久

飢えていた

迷いたくて

行き当たりばったり歩いた

何か有りそうで

結局何もない

無力な自分に絶望する

整理できなくなった

心の中のもやもや

ほったらかしは危険

ゆっくり窒息する

影に追い詰められて

器用な言葉は返せなかった

自分から目を逸らして生きている

魔法の言葉に誘われて

心地良い落とし穴へ

私から逃げようとする私
私を置いてけぼりにした私
私を信頼していない私
私を私と認めたくない私

転がって 転がって

二十一の眼を持つ

立方体が止まる

梅干しのおにぎり食べる

【講評】

生き難さを自己との対話で表出した作品です。重いテーマを乾いた言葉で、リズムよく展開しています。全体がネガティブな言葉に満ちていますが、ネガティブな言葉の重なりが自己肯定へと反転する面白さがあります。

(佳作) 一般の部

水になりたい

倉澤 正樹

弟

坂本 律江

人と争わず

低いところに向かって

黙々と流れ逝く

四角いところじゃ四角く

丸いところじゃ丸く

力むことなく柔らかに

脈々と流れ逝く

万物を潤して報いを求めず

心を空にして

あるがままに流れ逝く

隠しきれない苦しみを抱えて
弟は帰ってきた

風は

あたたかく

冷え冷えとした肌ざわりを持っている

庭の木々を巡り

家の隅々までも撫でながら

何度も

何度も……

吹き抜けて行つた

音楽と向き合つた青春

どう折り合いをつけ

何処ではぐれたのだろう

弟は病んでいた

限られた命

50年

乾いた空白の音がする

派閥

井川 水穂

二人きりの病院のエレベーター
痩せた背中を
姉弟の近しさで悲しく確かめる

体のすき間に
たまっていく
孤独な寂しさ

もうすぐ命日
青葉のこもる庭を
風が
通りぬける

愛おしい鶺鴒の声がして
曇天の窓を開ける

初夏の入り口を煙に巻いた
鉄道模型の幻想列車

様々な光景を見せられて

派閥と化した

季節の亡霊は

亡くなった者を

蘇えらせる口述に使っている

曇天から雨へと

派閥を変えた

木々の大臣たち

様々な虚構を挟つて

凝固な清涼を組み立てている

アマリリス

大久保 まり子

土も水も
いらないう
玉ネギのよう
な球根をもら

その辺にほつたらかしても
大丈夫といわれたけれど
君のことは何も知らないから
鉢植えにして
じっと 春を待った

眩しい朝の光
小さな希望が
みえてきた

三角にとがった葉先
舌のような形の花芽
ぐいぐいと
天を突くように
伸びている

出会えるよろこび
ユリに似た鮮やかな赤い花
真っ直ぐな迷いのなさに
わたしの背筋も
伸びている

五月の空に
アマリリスの長い茎が
自分のすべてを
さらけ出している

高架橋

幼い頃祖父から耳にした記憶
都市計画の青写真があると
絵空事と思いつつ
おぼろげな夢を抱いた
歳月は風のごとく過ぎ去った

桜の花びらが舞い散る
観音様の境内に立つと
泰然と聳える紫峰筑波山
時に生きる力を与えてくれる
広がる田園に白鷺が羽ばたく

警報が鳴り遮断機が下りて
勝田行の電車が走り去ると
自転車の中学生たちが
一斉に学校へと向かう

道路に打たれた鋸
隣家もアパートもやがて姿を消す
塀と庭が取り壊され
隅切りとなる私の家

山中 和江

季節を彩る花と木
カイドウ 柿 金木犀 山茶花
百日紅 枝垂れヒバ 芍薬 蘇芳
ツツジ ミカン ムクゲ 紅葉
ピンクのリボンが巻いてある

線路を越える高架橋
どんな絵に仕上がるのだろう

車窓

豊田 龍彦

月にはウサギがいる
と信じていた頃
父が教えてくれた

月が追いかけてくるのはね
月が遠くにあるからなんだ

近くものは
すぐに見えなくなってしまうけど
遠くものは
いつもそばにいてくれる

月にはウサギが住んでいて
休まずモチをついている
昔から同じ姿で

月にウサギはいない
と知っている今でも
父は伝えてくれる

月日に追いかけられるのは
思いが遠くにあるからだ

遠い記憶は
いつも私とともにある

月にはウサギが住んでいて
変わらずモチをついていた